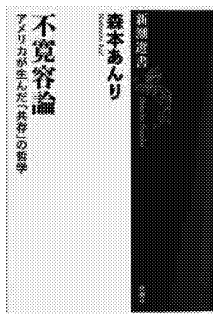


不寛容論

森本 あんり著

議会に暴徒が乱入し、選挙の結果に異を唱える。目を疑う光景が繰り広げられた米国で、新しい指導者の就任式では「結束」と「民主主義」が幾度も繰り返された。この現象は一体、何なのか、どう解釈すればよいのか。著者は逆説的に「不寛容」のタイトルで、植民地時代にまでさかのぼり、米国の現状を分析する視点を提示する。

もともと米国は英国から脱出してきた急進的なピューリタン（清教徒）たちが中心となっていて、それが人工的な国家である。このため合衆国憲法が唯一



「建前」崩れた米国 建国から分析

のよりどころで、それが故に政治的には「建前」をことのほか重視してきた。100年前には禁酒法を制定したこともあるほどだ。

それが壊れ、人々が政治的な建前にうんざりしていることを明確に示したのがドナルド・トランプ前大統領の登場だった。どんな失言をしても、政敵を罵倒しても岩盤支持層は離れず、憎しみだけが増えていく。こうした現象を、著者はこれまでの寛容論の理解は「中世的」だとし、文化的、歴史的、多角的なアプローチで分析し、問題の本質を解き明かす。

日本でも「大統領選挙は不正だ」「勝ったのはトランプ」との言説がネットにあふれた。それだけに米国の成り立ちにまでさかのぼった論考は示唆に富む。（新潮社・1600円）